

J.S.バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈

— 第10番 ト長調 BWV 796 —

藤 本 逸 子

はじめに

この小論に先立ち、「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』¹⁾の楽曲分析と演奏解釈」²⁾と題し、「第1番ハ長調 BWV 772³⁾」から「第11番ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番イ長調 BWV 783」から「第15番ロ短調 BWV 786」までを、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第17号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。続いて、「J.S.バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈」と題し、「第1番ハ長調 BWV 787」から「第9番ヘ短調 BWV 795」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第19号」から「同第27号」に、楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたって、「三声シンフォニア」の「第10番ト長調 BWV 796」を取り上げたものである。

楽曲分析と演奏解釈

「Sinfonia 10」は、33小節で構成された曲である。テーマは12回現れ、ストレッタはない。テーマと対旋律という構造ではなく、テーマの断片やテーマの変奏がテーマに添えられた形で作り上げられている。「W.F.バッハのための小曲集」⁴⁾において、この「Sinfonia 10」にあたるのは、53番めの曲で「Fantasia 5」(BWV 796)と題されている。双方には、表Iに示したような多くの違いが見られる。特に、臨時記号の細かい違いが多い。そこに、「Sinfonia 10」として世に出すにあたり、推敲を重ねたことが伺われる。

1) 「二声インヴェンション」と「三声シンフォニア」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子1985年（以下「第2号における小論」）の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「 」に入れて表わす。

3) BWV=Bach - Werke - Verzeichnis, W. シュミダーによるJ.S.バッハ作品総目録番号。

4) 「W.F.バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

表I 「Sinfonia 10」と「Fantasia 5」の相違箇所

Sinfonia 10	Fantasia 5
⑤ ⁵⁾ 中声3拍め A音 ⁶⁾ H音 C音 A音	⑤ 中声3拍め A音 H音 Cis音 A音
⑥ 上声2拍め E音 D音 C音 H音	⑥ 上声2拍め E音 D音 Cis音 H音
⑮ 上声2拍め C音 D音 E音 Fis音	⑮ 上声2拍め Cis音 Dis音 E音 Fis音
⑮ 中声2拍め 八分音符 A音 C音	⑮ 中声2拍め 四分音符 A音
⑮ 中声3拍め 八分音符 H音 E音	⑮ 中声3拍め 八分休符 八分音符 E音
⑮ 下声2拍め 八分音符 A音 Dis音	⑮ 下声2拍め 八分音符 A音 十六分音符 G音 Fis音
⑳ 上声2拍め H音 (前音からのタイあり) E音	⑳ 上声2拍め D音 (タイなし) E音
㉑ 下声2拍め H音 A音 H音 C音	㉑ 下声2拍め H音 Ais音 H音 Cis音
㉑ 下声3拍め D音 E音 F音 C音	㉑ 下声3拍め D音 E音 F音 G音
㉒ 下声1拍め D音 E音 D音 C音	㉒ 下声1拍め F音 E音 D音 C音
㉓ 下声2拍め A音 G音 A音 H音	㉓ 下声2拍め A音 Gis音 A音 H音
㉓ 下声3拍め C音 D音 E音 H音	㉓ 下声3拍め C音 D音 E音 Fis音
㉔ 下声1拍め C音 D音 C音 H音	㉔ 下声1拍め E音 D音 C音 H音
㉕ 上声1拍め 四分音符 G音 (前音からのタイなし)	㉕ 上声1拍め 二分音符 G音 (前音からのタイあり)
㉕ 上声2拍め G音 (前音からのタイあり) H音 A音 G音	㉕ 上声2拍め 前拍から続く二分音符 G音
㉖ 上声1拍め 四分音符 F音	㉖ 上声1拍め 二分音符 F音
㉖ 上声2拍め F音 (前音からのタイあり) A音 G音 F音	㉖ 上声2拍め 前拍から続く二分音符 F音
㉗ 上声1拍め 四分音符 E音 (前音からのタイあり)	㉗ 上声1拍め 二分音符 E音 (前音からのタイあり)
㉗ 上声2拍め E音 (前音からのタイあり) G音 Fis音 E音	㉗ 上声2拍め 前拍から続く二分音符 E音
㉘ 上声1拍め 四分音符 D音 (前音からのタイあり)	㉘ 上声1拍め 二分音符 D音 (前音からのタイあり)
㉘ 上声2拍め D音 (前音からのタイあり) F音 E音 D音	㉘ 上声2拍め 前拍から続く二分音符 D音
㉙ 下声1拍め C音 A音 H音 C音	㉙ 下声1拍め 八分音符 C音 A音
㉚ 終止線上にフェルマータ	㉚ 付点二分音符上にフェルマータ

5) 小節数は、数字を□で囲むことによって表わす。例：第4小節め→④, 第3小節めから第10小節め→③~⑩。

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例：変ロ音→B音, 嬰ヘ音→Fis音。

楽 曲 分 析（譜 1^{7）} 参 照）

この曲は、四つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第1部	①～⑩ (10)	第2部	⑪～⑲ (9)
主 題	①～② (2)	主 題	⑪～⑫ (2)
主 題	③～④ (2)	主 題	⑬～⑭ (2)
主 題	⑤～⑥ (2)	主 題	⑮～⑯ (2)
主 題	⑦～⑧ (2)	間奏2	⑰～⑲ (3)
間奏1	⑨～⑩ (2)		
第3部	⑳～㉓ (6)	第4部	㉔～㉗ (8)
主 題	㉔～㉕ (2)	主 題	㉔～㉕ (2)
主 題	㉖～㉗ (2)	間奏3	㉘～㉚ (3)
主 題	㉘～㉙ (2)	主 題	㉛～㉜ (3)

各部分における楽曲分析

第1部

主 題

- ①～②・①～②上声部には、八分休符と付点八分音符からなる要素（a1）と、順次上行する四つの十六分音符からなる要素（b）と、2度上行・3度下行・4度上行とジグザグ動く四つの十六分音符からなる要素（c）と、（b）の反行形を二つ連ねた（q × 2）と、（b）の反行形（q）の最後が2度上行した形（q1）からなるテーマ（T）がある。
- ・（a）と（b）は、2度下行する形で繋がっている。以下、（b）と（c）は2度上行、（c）と（q × 2）は2度下行、（q × 2）と（q1）は7度跳躍上行する形でそれぞれ繋がっている。
 - ・（a）は、（a1）で出現するのは3回だけで、他の9回は変形している。その変形によって、（a）と（b）が2度上行する形で繋がっているところもある。
 - ・②の（q）の最後は、2度上行（q1）し、主調のG dur^{8）}に（T）を収めているが、（q）の最後はいつも2度上行するわけではなく、（q）のままで順次下行したり、跳躍進行したりと変化している。
 - ・①～②中声部は、2小節とも全休符である。

7) この小論における「Sinfonia 10」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach 「Inventionen und Sinfonien」Urtext（Bärenreiter - Verlag, Kassel 1972）を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の大文字は長調、小文字は短調を表わす。例、ハ長調→C dur あるいはC:, イ短調→a moll あるいはa:.

- ・①～②下声部は、①でG durの主和音の和声音を鳴らした後、カデンツ（k）のバスらしい動きをしている。

主 題

- ③～④・③～④上声部は、中声部の（T）の（b）にそって、6度上で（b）を鳴らし、D durの（k）に入っている。
- ・③～④中声部には、主調の属調であるD durで（T）がある。
- ・③～④下声部は、D durの下属音と第三音を鳴らした後で、（k）に入る。

主 題

- ⑤～⑥・⑤～⑥上声部には、D durの（T）がある。この（a）は、四分音符と十六分音符がタイで結ばれた形（a2）に変化している。（T）の終わりは、そのまま順次下行し（q）となっている。
- ・⑤～⑥中声部は、（b）が二つ並んだ（b×2）・（c）・（q×2）から一つ置きに音を拾った（q×2'）と続き、（q×2'）の最後の音から、6度跳躍上行してC音に入り、G durへの転調を確実なものとしている。この中声部は、（b×2）の後半から（c）・（q×2'）と、上声部の（T）の音形に沿って動き、6度下で（T）を支えている。
- ・⑤～⑥下声部は、休止している。

主 題

- ⑦～⑧・⑦～⑧上声部は、G durの属音・主音・導音を、四分音符とそれに続く音符をタイで結んで鳴らしている。これら三つの音の間を（b）と（q×2'）が繋いでいる。この（b）は、下声部の（T）の（b）に沿って動き、6度上の音を鳴らしている。（q×2'）は、同じく下声部の（T）の（q×2）に沿って動き、3度上の音を鳴らしている。
- ・⑦～⑧中声部は、G durの第三音・下属音を、四分音符と二分音符とで、それぞれに続く音符をタイで結んで鳴らしている。この二つの音を（q1）・（c）・（q）で挟んでいる。（c）は、上声部の（b）と同じように、下声部の（T）の（c）に沿って動き、6度上の音を鳴らしている。（q）も、上声部の（q×2'）のように、下声部の（T）の（q2）に沿って動き、3度上の音を鳴らしている。
- ・⑦～⑧下声部には、G durの（T）がある。この（T）の終わりの（q）は、4度跳躍上行（q2）している。

間奏1

- ⑨～⑩・⑨～⑩上声部は、直前の⑧の音形をそのまま2度下へ、2度下へと2回ゼクエンツしている。その間に、G durからe mollに転調してE音に至り、第1部を終了している。
- ・⑨～⑩中声部も、上声部同様、⑧の音形をそのまま2度下へ、2度下へと2回ゼクエンツし、e mollの第3音に至り、第1部を終止している。
- ・⑨～⑩下声部は、⑧の（T）後半を上声と中声部同様に2回ゼクエンツしている。

すなわち（T）後半が、そのまま間奏となっているのである。ゼクエンツの最後は、e mollの主音を響かせ、第1部を終止させている。

第2部

主 題

- ⑪～⑫・⑪～⑫上声部は、e mollの主音を響かせたあとは、D音・C音・D音と動いて、a mollへの転調へと導いている。
- ・⑪～⑫中声部には、e mollで始まりa mollに至る（T）がある。この（T）の出だしは、四つの十六分音符で順次下行している。これは、要素としては、全く（q）と同じであるが、（a）の変形の一つとして、（a3）と記すことにする。
 - ・⑪～⑫下声部は、⑪の2拍めの（b）以外は、自由な動きで、a mollへの転調を促している。この下声部の（b）は、中声部の（T）の（b）に沿って動き、6度下の音を鳴らしている。

主 題

- ⑬～⑭・⑬～⑭上声部には、a mollの（T）がある。この（T）の出だしも、全く（q）と同じであるが、⑪～⑫の（T）同様、（a）の変形の一つとして、（a3）と記すことにする。
- ・⑬～⑭中声部は、a mollの属音と下属音を付点二分音符で響かせている。
 - ・⑬～⑭下声部は、自由な動きで、a mollを和声的に支えている。

主 題

- ⑮～⑯・⑮～⑯上声部は、a mollで始まりe mollに至る（T）がある。この（T）の出だしは、四つの十六分音符で順次上行しており、全く（b）そのものであるが、⑪～⑭同様、（a）の変形の一つとして、（a4）と記すことにする。この（T）の終わりは（q2）となっている。ここで4度跳躍上行することによって、e mollの転調は安定性を得ずに、h mollへの転調へと向かうことになる。
- ・⑮～⑯中声部は、⑮は自由に動いているが、⑯では⑧の上声部と同様の役目を負い（ $q \times 2'$ ）が上声部の（T）の（ $q \times 2$ ）に沿って動き、6度下の音を鳴らしている。
 - ・⑮～⑯下声部も、中声部同様、⑮は自由に動いているが、⑯では⑧の中声部と同様の役目を負い（q）が上声部の（T）の（q2）に沿って動き、6度下の音を鳴らしている。

間奏2

- ⑰～⑱・⑰～⑱の間奏2は、⑨～⑩の間奏1同様、直前の⑯の音形を、そのまま2度下へゼクエンツすることで成り立っている。間奏1では、ゼクエンツが2回に留まっているが、間奏2では3回行われている。また、間奏1と間奏2では、声部も入れ替わっており、間奏1の上声部は間奏2では中声部へ、中声部は下声部へ、下声部は上声部へと、それぞれ移っている。この間奏2の間に、e mollからh mollへ

転調している。3回のゼクエンツを終え、h mollの主和音に至ったところで、第2部が終了している。

第3部

主 題

- ⑳～㉑・㉒～㉓上声部は、(q)の後、h mollの主音と導音を鳴らしている。
- ・㉒～㉓中声部には、h mollの(T)がある。この(T)は、(a2)で始まり、(q1)で終わっている。
- ・㉒～㉓下声部は、h mollの第三音・第六音・属音を鳴らした後、h mollの(k)のバスの動きをしている。

主 題

- ㉒～㉓・㉔～㉕上声部は、h mollの主音の後、(q)の音価を2倍の長さにした(q×)を二つ置いている。
- ・㉔～㉕中声部は、(b)の後、上声部の(q×)に沿って3度下で(q×)を鳴らしてGis音に入り、a mollへの転調を促している。
- ・㉔～㉕下声部には、h mollで始まり、a mollに至る(T)がある。この(T)は、(a2)で始まり、(q)で終わっている。また、この(T)の(c)は、2度上行の後、4度下行・2度上行とジグザグに動く音程の幅が変化(c')している。

主 題

- ㉔～㉕・㉖～㉗は、3声とも㉒～㉓を、2度下でゼクエンツしている。ただし、上声部は、㉒より2度高い音で始まる。従って、㉒では最初の音から(q×)に4度跳躍上行して繋がっているが、㉔では2度順次上行して繋がっている。
- ・㉔～㉕の下声部は、㉒～㉓の(T)をゼクエンツすることになる。㉔～㉕の(T)は、a mollで始まりG durに至っている。
- ・G durの主和音を鳴らし、第3部を終了している。

第4部

主 題

- ㉖～㉗・㉘～㉙上声部は、(q)を挟んで、G durの主音と導音を鳴らしている。この主音は、㉖と㉗で独立した四分音符で記されているが、タイで結ばれて然るべきものと思われる。
- ・㉘～㉙中声部には、G durの(T)がある。この(T)は(a4)で始まり、4度跳躍上行する(q2)で終わっている。(T)の最後を4度跳躍上行させることで、G durは不安定になり、転調へ向かう動きとなっている。
- ・㉘～㉙下声部は、(q×2')の反行形(b×2')と(c)の音価を2倍の長さにした(C×)と(q)が置かれている。

間奏3

- ⑳～㉔・㉕～㉗は、3声とも直前の㉖の音形をそのまま2度下へゼクエンツすることで成り立っている。ゼクエンツは3回行われている。音形は違うが、間奏1と間奏2と同様の作りとなっている。この間奏の中で、C durとG durの間をめまぐるしく行き来するような転調している。

主 題

- ㉘～㉚・㉛～㉜上声部には、G durで最後の(T)がある。この(T)は、(a3)に始まり、(q1)に終わっている。この終わりが、そのまま曲の終止となっている。
- ・㉛～㉜中声部は、四分休符の後、G durの主音・導音・主音の順に音を響かせている。最後の主音が、曲の終止音となる。
 - ・㉛～㉜下声部は、(q)・(q1)・(c)・(b)と続き、(k)に入る。(k)は、いかにもG durのバスらしい動きをして、曲を終止させている。

演奏解釈 (譜2参照)

テンポ

テンポに関して、諸校訂版⁹⁾は、表Ⅱのような指示をしている。

表Ⅱ 諸校訂版における「Sinfonia 10」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示
Hans Bicshoff	Allegro ♩ = 100
Ferruccio Busoni	Allegro deciso
Alfredo Casella	Allegro veloce
S.A.Durand	Allegretto
James Friskin	Allegro brillante ♩ = 100
Vilem Kurz	Allegro
Wm.Mason	Allegro moderato
G.E.Moroni	Allegretto ♩ = 100
Bruno Mugellini	Allegro giusto ♩ = 96
Julius Rötgen	Allegro ♩ = 92
井口基成	Allegro
千倉八郎	Allegro ♩ = 96

また、内外11人の演奏時間は、表Ⅲのとおりである。

表Ⅲ 諸演奏家における「Sinfonia 10」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	0'59"
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	0'58"
Glenn Gould	1963~64年	ピアノ	0'59"
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	1'07"
András Schiff	1982~83年	ピアノ	1'04"
高橋 悠治	1977~78年	ピアノ	1'13"
田村 宏	不明	ピアノ	1'02"
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	1'09"
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	1'18"
Helmut Walch	1961年	チェンバロ	1'24"
Don Dorsey	1985年	シンセサイザー	1'00"

9) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。

表Ⅱの校訂版の指示に見るように、どの演奏もゆっくりしたテンポではない。しかし、ヴェルヒヤの演奏時間は、エッセンバッハの約1.4倍の長さである。ドーシーは、シンセサイザーを、オルゴールをイメージさせるような音色に設定し、シンプルにまとめている。それに対して、高橋悠治は、装飾音を多用し、華やかな演奏を行っている。

筆書は、十六分音符の美しい流れを大切にし、少し落ち着いた雰囲気を表現をしたいので、「Allegretto ♩=88」というテンポをとる。

アーティキュレーション

表Ⅲにあげた演奏では、十六分音符は、皆レガート奏法であった。八分音符は、二つずつレガートで結ぶ演奏、スタッカート演奏、ノンレガート演奏、レガート演奏と様々であった。

筆者は、十六分音符はレガート、八分音符はノンレガート、四分音符は充分テヌートしたノンレガートで奏す。区切りを感じたいところには、譜2に|を記した。

装飾音

「Sinfonia 10」(BWV 796)の原典版には、装飾音は付されていない。表Ⅲにあげた演奏では、上記の高橋だけでなく、シェフも装飾音を付した演奏をしている。

筆者は、装飾音を付す必要性を感じない。

各部分における演奏解釈

- ①～②・堂々とした*mf*で、明るく健全に始める。
- ・上声部の(T)は、下声部の安定したバスの動きに乗って、(T)のクライマックスである②1拍めのE音に向かって*cresc.*する。
 - ・(T)クライマックスのE音を少々テヌートした後、順次下行する音に沿って、おだやかに*dim.*する。
 - ・②3拍めの(q1)を美しく歌い上げて、③1拍めのH音に入り、(T)を納める。
 - ・下声部は、四分音符を豊かに響かせて、上声部の(T)を支える。
 - ・②から③にかけての下声部は、特に(k)の動きを意識する。
- ③～④・属調であるD durの(T)は、中声部に現れているので、同じ*mf*ではあるが、①～②より少し控えた表現となる。
- ・上声部も下声部も、d durの終止感を意識し、(k)を響かせる。
- ⑤～⑥・上声部の(T)は、*f*で上行・下行に沿って*cresc.*と*dim.*をする。
- ・上声部の⑥1拍めのH音は、第1部のクライマックスとして、高らかに歌い上げる。
 - ・中声部は、上声部(T)の6度下で、影のように寄り添って歌いながら(T)を支える。
- ⑦～⑧・下声部の(T)は、音の太さを意識して、おおらかに*cresc.*と*dim.*をする。

- ・上声部と中声部は、両声部の間を交互に出現する (q)・(b)・(c)・(q × 2')・(q) の掛け合いを楽しむ。
- ⑨～⑩・この間奏は、ゼクエンツの一塊りの中で少々 *dim.* をしながら、1小節毎にテラス状に *dim.* し、第1部を *mP* で終える。
 - ・下声部の各小節の最初の音を少々テヌートして、⑧の音も加えて、E音・D音・C音と音が動いていくことを意識する。
- ⑪～⑫・第2部は、*mP* で始める。
 - ・中声部の (T) は、*moll*らしさと転調による調の不安定さを意識し、不安感を出す。
 - ・上声部と下声部は、比較的自由的な動きをしているので、そのリズムを生かすようにする。
- ⑬～⑭・⑪～⑫より少し強くなって、*mf* となる。
 - ・上声部の (T) は、*moll*ではあるが、上に昇っていく予感、成長の予感を表現する。
 - ・中声部は、どっしり安定した音を響かせる。
 - ・下声部は、⑬～⑭にしか出現しない特徴的なリズムを楽しむようにする。
- ⑮～⑯・全曲中最大のクライマックスが出現するところである。*f* で奏す。
 - ・上声部の (T) は、全曲中最大のクライマックスである⑯1拍めのH音に向かって、豊かに *cresc.* する。クライマックス後は、*dim.* するものの、あまり納めすぎないようにして、次の間奏に続いていくようにする。
 - ・中声部と下声部は、⑮では、(T) に沿って *cresc.* する。⑯では、次の間奏にゼクエンツで続いていくことを視野に入れて、*dim.* する
- ⑰～⑱・この間奏の間に、*f* から *mP* まで *dim.* して、第2部を終わる。
 - ・⑨～⑩の間奏と同じように、ゼクエンツの一塊りの中で少々 *dim.* をしながら、1小節毎にテラス状に *dim.* する。
 - ・⑨～⑩同様、上声部の各小節の最初の音を少々テヌートして、⑯と⑲の音も加えて、C音・H音・A音・G音・Fis音と音が動いていくことを意識する。
- ⑳～㉑・第3部は、*mP* で始まる。
 - ・(T) が、中声部に現れ、上声部の動きも下声部の動きも③～④に似ている。華々しく主張するような表現はしないが、安定感のあるどっしりした存在感を出したい。
- ㉒～㉓・*P* で、内面的な美しさを出したい。
 - ・下声部の (T) は、(c) が (c') に変化することによって、派手やかさがなくなり、より内面的な表現となっている。おだやかに *cresc.* と *dim.* をしたい。
 - ・上声部と中声部は、㉒では両声部が協力して3度の重音で下行し、㉓では中声部の響きの上で上声部が静かにゆったり下行している。これらの動きを静謐な中で行い、下声部の内面性を引き立たせるようにする。
- ㉔～㉕・ここも *P* で、奏す。
 - ・㉒～㉓の動きを2度下で、*G dur* で鳴らすことによって、希望に向かう静かだが力強いエネルギーを感じる。単に、*P* で奏すのではなく、内に秘めた強さを表現し

て、第3部を終える。

- ②6～②7
- ・②2～②5で内に秘めていたエネルギーを外に放出するように*cresc.*して*f*に至らせる。
 - ・中声部の(T)は、クライマックスの②7 1拍めのE音に向かって伸び伸びと*cresc.*する。
 - ・下声部も、(T)に沿って、*cresc.*する。
 - ・②7は、クライマックス後、*dim.*をするが、⑧や⑩同様、次の間奏のゼクエンツを視野に入れて、納めすぎないようにする。
- ②8～③0
- ・この間奏の間に、*f*から*mf*まで*dim.*する。
 - ・前出の二つの間奏と同じように、ゼクエンツの一塊りの中で少々*dim.*をしながら、1小節毎にテラス状に*dim.*する。
 - ・⑨～⑩及び⑬～⑭同様、中声部の各小節の最初の音を少々テヌートして、②7の音も加えて、E音・D音・C音・H音と音が動いていくことを意識する。
- ③1～③3
- ・最後の(T)のクライマックスである③2 1拍めのE音に向かって、堂々と惜しみなく*cresc.*する。
 - ・上声部の(T)は、クライマックス後も*dim.*せず、厚みを増して最後のH音に向かう。テンポは緩めず、最後の(9 1)を充分テヌートして曲を閉じる。
 - ・中声部は、G durの主音・導音・主音を豊かに響かせ、安定した終止に上声部と下声部を導く。
 - ・下声部は、上声部に反行する動きをして幅広い響きと緊張を与え、その後に安定した(k)に入って、曲を閉じている。上声部同様、*dim.*せず、テンポも緩めず、最後の(k)を充分テヌートし、深い趣を持った響きで曲を終える。

おわりに

「Sinfonia 10」は、伸び伸びと素直に動き回る、爽やかな少年を感じさせる愛らしい曲である。十六分音符による音階を多用したテーマという意味で、インヴェンションの11番・シンフォニアの1番に似ている。特に、インヴェンションの11番とは、7度跳躍上行するところもよく似ている。このような類似から、これら3曲は同時期に作曲された可能性も感じられる。

【追】

豊橋創造大学短期大学部研究紀要第27号に寄稿した「J.S.バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈 ー第9番 へ短調 BWV 795ー」に、二箇所、誤りがありましたので、次のように訂正させていただきます。ご指摘くださったNH氏に、心より感謝申し上げます。

- ・ 60ページ下から8行目

(誤) その間に、f mollからA durに転調している



(正) その間に、f mollからAs durに転調している

- ・ 61ページ上から6行目

(誤) ①～②下声部には、As durで



(正) ⑪～⑫下声部には、As durで

参考文献・参考楽譜・参考CD

*参考文献

- ・市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)
- ・山崎 孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

*参考楽譜

原典版

- ・Johann Sebastian Bach 「Klavierbuchlein für Wilhelm Friedemann Bach」Urtext (Bärenreiter - Verlag, Kassel 1979)
- ・Johann Sebastian Bach 「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)
- ・BACH 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Bärenreiter - Verlag, Kassel 1972)
- ・J.S.BACH 「Inventionen Sinfonien」Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)
- ・BACH 「INVENTIONEN UND SINFONIEN」Urtext (C.F.Peters coporation, Frankfurt 1933)
- ・J.S.Bach 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H&Co.,K.G.,Wien 1973)
- ・バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 角倉一朗校訂(カワイ出版 1983)
- ・バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 長岡敏夫編(音楽之友社 1965)

校訂版

- ・J.S.BACH 「15 SYMPHONIEN」Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach/M)
- ・BACH 「TOW-and Three-Part Inventions」Ferruccio Busoni (G.Schirmer, New York 1967)
- ・J.S.BACH 「Dreistimmige Inventionen」Ferruccio Busoni (Breitkopf&Haltel Weisbaden)
- ・BACH 「INVENTIONI TRE VOCI」Alfredo Casella (Edizioni Curci Milano 1946)
- ・J.S.BACH 「Inventions à 2 et 3 voix」Durand S.A. (Editions Musicales, Paris 1957)
- ・J.S.BACH 「Three-Part Inventions」James Friskin (J.Fischer & Bro. Belwin Mills 1970)
- ・JOH.SEB.BACH 「15 Dreistimmige Inventionen (Sinfonien)」Alfred Kreutz (B.Schott's Sohnen Mainz 1950)
- ・BACH 「DVOUHLASÉ INVENCE A TŘÍHLASÉ SINFONIE」Vilem Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)
- ・BACH 「Three-Part Inventions」WM.Mason (G.Schirmer Inc New York 1967)
- ・BACH 「15 INVENTIONI A 3VOCI」G.E.Moroni (Carisch S.p.a. Milano 1981)
- ・BACH 「INVENTIONI A TRE VOCI」Bruno Mugellini (Ricordi 1983)
- ・JOH.SEB.BACH 「ZWEI-UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)
- ・バッハ「二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」バッハ集4 井口基成(春秋社 1983)
- ・バッハ「インヴェンション」(音楽之友社 1955)
- ・バッハ「インヴェンション」全音楽譜出版社出版部編(全音楽譜出版社)
- ・バッハ「インヴェンション&シンフォニア」ピアノ指導講座7 千倉八郎編(日音楽譜出版社 1983)
- ・バッハ「インヴェンション&シンフォニア 解釈と奏法」千倉八郎編(日音楽譜出版社 1983)
- ・J.S.バッハ「インヴェンションとシンフォニア」Hans Bischoff 角倉一朗訳(全音楽譜出版社 1972)

*参考CD

- ・Aldo Ciccolini (Piano) 「J.S.BACH INVENTION」TOCE6601 (TOSHIBA EMI)
- ・Christoph Eschenbach (Piano) 1979 「INVENTION & SINFONIA」F26G20323 (POLYDOR)
- ・Glenn Gould (Piano) 1989 「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」28DC5246 (CBS SONY)
- ・Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986 「J.S.Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」VDC-1079 (VICTOR)
- ・András Schiff (Piano) 1985 「J.S.BACH 2&3 PART INVENTIONS」FOOL-23100 (POLYDOR)
- ・高橋悠治 (Piano) 1991 「インヴェンションとシンフォニア 他」COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)
- ・田村宏 (Piano) 1989 「J.S.バッハ インヴェンション」CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)
- ・Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985 「J.S.BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」POCA-2113 (ARCHIV)
- ・Gustav Leonhardt (Cembalo) 1992 「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」BVCC-1863 (BMG VICTOR)
- ・Helmut Walcha (Ammer-cembalo) 1961 「J.S.バッハ／2声部のためのインヴェンション&3声部のためのシンフォニア」TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)

譜 1 「Sinfonia 10」 BWV 796 ①~③③ (楽曲分析)

第1部
主題

G:→D:

主題

D:→G:

主題

G:

第2部
主題

G:→e:→a:

主題

a:→e:

Detailed description of the musical score: The score is for a piece in 3/4 time, BWV 796. It is divided into two parts. The first part (measures 1-13) starts in G major and changes to D major (measures 5-8) and back to G major (measures 9-12). The second part (measures 13-14) starts in G major and changes to A major. The score includes various musical notations such as slurs, accents, and dynamic markings. The first part is labeled '第1部 主題' and the second part is labeled '第2部 主題'. The score includes various musical notations such as slurs, accents, and dynamic markings.

間奏2

16 $q \times 2$ $q2$ $q \times 2$ $q2$ $q \times 2$ $q2$

$q \times 2'$ $q \times 2'$ $q \times 2'$

e: → h:

q q q

第3部 主題

19 $q \times 2$ $q2$ q $q \times 2$ q

q a2 b c $q \times 2$ q

h: k k

q q

主題

22 $q \times$ $q \times$ $q \times$ $q \times$ $q \times$ $q \times$

b $q \times 2$ q $q \times$ $q \times$

h: → a: → G: a2 b c' 2° 4° a2 b c

T T

第4部 主題

25 $q \times$ q q q q q

a4 (b) b c $q \times 2$ $q2$

G: → C: b x 2' c x q

T c

間奏3

28 q q q q q q

4° $q \times 2$ $q2$ $q \times 2$ $q2$ $q \times 2$ $q2$

C: → G: q q q

主題

31 $q \times 2$ $q1$ $q1$ $q1$ $q1$ $q1$

a3 (q) b k $q \times 2$ $q1$

G: q q1 c b k

譜 2 「Sinfonia 10」 BWV 796 ①~③③ (演奏解釈)

Allegretto ♩ = 88

① テーマのクライマックス

mf

④ 第1部最大のクライマックス

f

⑦ dim.

⑩ mp

⑬ mf f

全曲最大のクライマックス

Musical score for measures 16-18. The piece is in G major and 3/4 time. Measure 16 is marked with a box containing the number 16. The dynamics are *dim.* (diminuendo). The right hand features a complex sixteenth-note pattern, while the left hand provides a steady eighth-note accompaniment.

Musical score for measures 19-21. Measure 19 is marked with a box containing the number 19. The dynamics are *mp* (mezzo-piano). The right hand continues with intricate sixteenth-note figures, and the left hand maintains its rhythmic accompaniment.

Musical score for measures 22-24. Measure 22 is marked with a box containing the number 22. The dynamics are *p* (piano). The right hand has a more active role with sixteenth-note patterns, and the left hand continues with eighth-note accompaniment.

Musical score for measures 25-27. Measure 25 is marked with a box containing the number 25. The dynamics are *f* (forte). The right hand features a prominent sixteenth-note melody, and the left hand continues with eighth-note accompaniment.

Musical score for measures 28-30. Measure 28 is marked with a box containing the number 28. The dynamics are *dim.* (diminuendo). The right hand has a sixteenth-note melody, and the left hand continues with eighth-note accompaniment.

最後のクライマックス

Musical score for measures 31-33. Measure 31 is marked with a box containing the number 31. The dynamics are *mf* (mezzo-forte) and *f* (forte). The right hand has a sixteenth-note melody, and the left hand continues with eighth-note accompaniment, ending with a final chord.